

山岡鉄舟の剣禅修行道の極地に至る道程

— 生死得脱の円現へ —

児玉正幸*, 大坪 壽*

The Way to The Culmination of Training of Both Swordsmanship and Zen Buddhism

— In Case of Tessyuu YAMAOKA —

Masayuki KODAMA*, Hisashi OTSUBO*

Abstract

A master of swordplay Tessyuu YAMAOKA was typical of the *samurai* (Japanese swordsmen) of the Edo period. So he cultivated his manners and character more than he developed his swordsmanship. Moreover, he trained himself in both swordsmanship and Zen Buddhism all his life, because he believed that they aimed at one and the same goal.

This paper seeks to research into not only the greatest political deeds of Tessyuu YAMAOKA in the dying days of the shogunate, but also the way to the culmination of training of both swordsmanship and Zen Buddhism.

KEY WORDS: *ethics, Tessyuu YAMAOKA, Bushido*

はじめに

幕臣山岡鉄舟(1836～1888)は求道的性格が強く、世俗の名声と利益とは無縁の幕末の剣豪であった。

明治維新の元勳西郷隆盛は生前、江戸城無血開城の陰の大功労者・鉄舟の「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ」誠に「始末に困る人柄」¹⁾を鐘愛した。

明治21年、鉄舟が座禅姿で大往生すると、かつての同僚海舟もまた、西郷同様、鉄舟の「清爽の心胆」と「勇剛の氣象」²⁾を追懐した。

鉄舟は維新後、その人品骨柄を回天の最大の立

役者・西郷と海舟に見込まれて、明治5年には明治天皇の侍従要請まで受けている。

従来の山岡鉄舟研究では、鉄舟と彼を取り巻く歴史的事実の系統的掘り起こしが不十分であった。そこで本稿では、批判的視座より無我無欲の人鉄舟の果たした歴史的役割を自記を要に再現考察する(一)と同時に、彼の剣禅修行道の極致に至る道程について考察する(二)。

— 鉄舟最大の政治的功績—江戸城無血開城の予備会談の成功

(1) 江戸城無血開城の経緯

* 鹿屋体育大学

「三舟にそれぞれ趣がある。海舟は智の人、鉄舟は情の人、泥舟に至っては、それ意の人か」と述懐したのは、頭山満であった³⁾。海舟とは無論、幕臣の勝海舟のことである。鉄舟と泥舟はこれまた幕臣で、義兄弟の山岡鉄舟と高橋伊勢守泥舟に他ならない。

泥舟は天下無双の槍の名手である。彼はその槍術を買われて、上野東叡山寛永寺内大慈院でひたすら恭順謹慎する將軍・徳川慶喜を警護する遊撃隊長を勤めた。他方、幕末三舟中、前二舟(海舟・鉄舟)は、江戸城無血明け渡しに当たり、西郷隆盛との外交折衝を成功裡に導いた歴史的偉人である。その巨頭会谈の経緯を、鉄舟が右大臣岩倉具視の求めに応じて提出した自記⁴⁾を基軸に再現考察すれば、次の通りになる。

イ) 慶喜の使者鉄舟と海舟の初見

官軍の本隊が駿府に到着しているのを知った慶喜は、恭順謹慎の意向を大総督宮(東征大総督の有栖川宮熾仁親王)に奏上する使者を探した。最適任者の海舟や泥舟は、強硬な主戦論者(將軍慶喜に解任された徹底抗戦派の小栗上野介以外にも、水野筑後守、小笠原吉岐守、榎本武揚、大鳥圭介、会津藩主・松平容保を初めとする東北列藩藩主等)の抑え込みや江戸市中の治安維持のために、持ち場を離れることができなかつた。慶喜の意向を含んだ泥舟が、その大役に推挙したのが32才の義弟鉄舟であった。將軍から直々に使命を拝領した鉄舟は若干の幕閣重臣に諮問したもののまともに相手にされず、やむなく目をつけた相手が、胆略ある人物との呼び声が高い海舟であった。

ところが、鳥羽伏見の戦い(慶応4年[1868]1月3日)で戦禍の恐怖が俄かに現実味を帯びた江戸百万の生霊を救済するために東奔西走する幕閣非戦論者・徹底恭順謹慎派の海舟はまだ、鉄舟とは一面識もなかつた。その上、海舟はあらかじめ、開明派重臣の参政・大久保一翁から、鉄舟は逆心を包蔵する刺客、と入れ知恵されていた⁵⁾。そのため、海舟は鉄舟との初対面(慶応4年3月5日)の折、疑心暗鬼のまま容易に心を開かなかつた。それも仕方がないことで、幕臣鉄舟は勤皇の

志士清河八郎と連れ立ち、公武一和の尊王攘夷党を旗揚げ(安政6年[1859])していたからである。清河も鉄舟も水戸藩との係累の強い北辰一刀流千葉周作道場に通う過程で、水戸学流の尊王攘夷主義思想の洗練を受けたものと考えられる。

ロ) 尊王攘夷討幕論者・清河八郎

ちなみに、この尊王攘夷党が文久3年(1863)新春結成の浪士隊(後の新撰組、その分派が新撰組)の母体となった。この浪士隊結成を裏で操作したのが大論客の清河八郎であった。八郎は鉄舟に働きかけ、その意を含んだ松平上総介忠敏(講武所剣術教授方)が政事総裁松平春嶽に働きかけ、風雲急を告げる王城の地への將軍家茂上洛(文久3年2月)の先供として、浪士隊結成の急務を献言した。その献策が受理されたのは文久2年12月であった(鉄舟26才)。幕府は旗本山岡鉄舟と松岡万を浪士隊の取締役に任命したものの、結果的には、尊王攘夷討幕論者の正体を現した清河八郎の策謀のために振り回されて、臍を噬むことになった。八郎は入洛(文久3年2月23日)早々、幕府の禄を食む浪士隊に対して幕府をないがしろにする過激な尊王攘夷を扇動し、孝明天皇から攘夷の勅諭まで入手したのである。浪士隊を攘夷決行の王師に編成し直す八郎の策動に反発して決別したのが、芹沢鴨や近藤勇を中心とするメンバーであった(後の新撰組)。一杯食わされて業を煮やした幕府は佐々木只三郎(講武所剣術教授方)等に命じて八郎を暗殺したのが、文久3年4月13日であった。

序でながら、翌元治元年(1864)には、武田耕雲齋率いる天狗党が筑波山に挙兵した。万延元年(1860)の桜田門外の変で井伊大老暗殺という大面目を失っていた幕府は、幕権衰退に焦慮の余り、天狗党の残党不慮800名に対する未曾有の大虐殺を執行して、全国の尊王攘夷過激派を討幕論へ傾斜させる機縁を与えてしまった。

ハ) 高士鉄舟、才子海舟を説破

海舟はそういう苦々しい歴史的経緯を回顧したのか、公的立場上、無名軽輩の上、海の物とも山

の物ともつかない鉄舟に取り合わなかった。しかしながら、会談中、海舟は鉄舟の鬼気迫る憂国の赤心と至忠至誠に圧倒され、ついに人物の器量と達識を見極めて、望みどおりにやってくれと言った。海千山千の政治家海舟は、無我無欲の高士鉄舟の捨て身の覚悟と無手勝流の使命達成の方途を聞くに及び、鉄舟とは初対面ながら、乾坤一擲東海道征討軍参謀西郷隆盛と渡り合える大役を任せ切れる人物だと洞見したのである。帰宅すると、海舟預かりの薩摩藩士益満休之助（尊王攘夷党を仲立ちとする鉄舟の同志）が事態を聞き及んで自宅を枉駕、同道を願い出たので、同意した、と鉄舟は語る⁶⁾。

二) 江戸城無血開城の予備会談

鉄舟は帰宅すると何事もなかったかのように茶漬けで腹ごしらえを済ませ、翌る6日には、同座の益満休之助を同行して、そのまま駿府に急行した。東海道中、官軍（薩摩藩・長州藩・大村藩・佐土原藩等）が随所に屯集している。鉄舟は、無我の心境で敵陣を突破しながら目的地に無事到着し、東征大総督府参謀西郷隆盛との会見に臨んだ。ここに江戸城無血開城に直結する歴史的な予備会談が成立することになった（3月9日）。

西郷や大久保一蔵（利通）は、鳥羽伏見の戦い（1月3日）後、徳川幕府を武力で平定し、慶喜の首級をあげる決意を固めていた⁷⁾。ところが、西郷は鉄舟との会談後、その考えを軌道修正した。西郷は、「命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ」鉄舟の死中に活を求める、大器量と熱誠に胸を打たれ、大総督府から出された以下の五箇条の徳川家処分案（岩倉が了承した西郷と大久保の共同文書で、実際は七箇条⁸⁾）を緩和することにしたのである。

- 一、城を明渡す事
- 一、城中の人数を向島へ移す事
- 一、兵器を渡す事
- 一、軍艦を渡す事
- 一、徳川慶喜を備前へ預る事

鉄舟は最後の条件だけは呑むわけにはいかなかった。主君慶喜を外様藩預かりにする屈辱的条件に、

徳川家恩顧の幕臣として同心できるはずがなかった。朝命だと威嚇する西郷に対して、鉄舟は一步も引かず、その条件受諾は君臣の道義に悖る行為、藩主島津公を將軍慶喜公の立場に置き換えてお考え頂きたい、と条理を尽くして、最後の条件の撤回に捨て身の熱弁を振るった。私心の片鱗もない一誠忠勤の鉄舟の姿に、「此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」⁹⁾、と官軍総大将の西郷はいたく感激してしまい、自分一人が引責する覚悟で、その条件をあっさり撤廃してしまったのである。尤も、当初は建て前として毅然たる態度で臨み、大義名分が立つ厳正な処断を主張しながらも、局を結ぶ最終場面においては寛典に落とし所を見いだすが、大器量人西郷の常套手段であった。後年、鉄舟は鉄舟で、「かれこそわたしの親友であったのだという思いを押さえることができない」¹⁰⁾、と西南戦争で国賊の汚名を受けたままの西郷に懐旧の情を洩らしている。この辺りに、嘆願抗議する鉄舟も人、聞き入れる西郷も人、との感を拭えない。

ホ) 海舟と西郷の本会談

帰路、九死に一生を得て帰府した（3月10日）鉄舟から、会見の顛末が慶喜及び海舟と一翁に復命されると、直ちに慶喜の名で江戸の随所に高札が立てられ、江戸百万の生霊の動揺を防ぐ手だてが図られた。

鉄舟の敷いた内戦終結のための予備会談に引き続き、海舟と西郷との両巨頭会談は、芝高輪田町の薩摩下屋敷で実現した（3月13日）。これは翌日に控えた正式の本会談を成功させるための根回しの内会談であった。その席上、西郷は海舟を相手に、鉄舟の大腹中の人物ぶりをべたぼめしている。「いやあの方は、どうのこうのと、言葉ではつきぬが、何分にも腑の脱けた人でござる。」「いや生命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ、と言ったような始末に困る人ですが、しかしあんな始末に困る人ならでは、お互いに腹を開けて、共に天下の大事を誓い合う訳には参りません。本当に無我無私の忠胆なる人とは、山岡さんのごとき人でしょう。」¹¹⁾

鉄舟の「無我無私の忠胆」を錬成したのは、「両刃、鋒を交えて避くるを須いず（滴水が鉄舟に授けた公案、次節参照）」の公案禅であった。

翌3月14日には、同薩摩下屋敷で停戦に向けた本会談が開かれた。出席者は幕府側が海舟と鉄舟、官軍側は薩摩藩の西郷と村田新八、中村半次郎（桐野利秋）他、大村藩の渡辺清左衛門であった。席上、海舟が東征大総督府から出された徳川家処分案中、「慶喜備前お預け」以外の全条件の履行を約束すると、西郷が官軍（品川の東海道軍・板橋の中山道軍・新宿の甲州街道軍）に対して、3月15日に予定されていた江戸城総攻撃の中止命令を發布した。こうして江戸城無血開城が成功したのである。

ちなみに、西郷が鉄舟や海舟と黙約した「慶喜備前お預け」条項の撤回は、京都の三職会議（三条実美、岩倉具視、木戸孝允、広沢兵助、大久保利通、西郷隆盛会席）の席上、空空寂寂誠心誠意の人、然諾を重んじる西郷の粘り強い説破の末に裁可された（3月20日）。

二 鉄舟の剣禅修行道の極致に至る道程

(1) 生死得脱の円現へ

彼の天与の高潔な性格に磨きを掛けたのは、剣禅両道の修行であった。では、彼の剣禅修行は如何なる道程を辿って、生死得脱しやうじつとくたつの円現に到達したのか。

イ) 剣道修行

鉄舟は旧幕臣であった。鉄舟は江戸侍として、幼少の頃より、剣の修行に怠ることはなかった。8才の頃、最寄りの旗本・久須美閑適齋に師事して神陰流（鉄舟著では「真影流」と表記）の剣術を学び、その後も父の赴任先の飛騨高山で神陰流に磨きを掛ける傍ら、10才で千葉周作門下の井上八郎清虎（後年、北辰一刀流玄武館師範代や幕府講武所剣術教授方）に師事した。ところが、両親の病没に伴い、鉄舟は9才より住み慣れた飛騨高山を離れて16才で帰府した。若き鉄舟は何事にも一路邁進する性分のままに、次々に江戸の諸流の

剣客を求めて立ち会った。彼が歴訪、試合った道場の中には、幕末の江戸を代表する三大道場（千葉周作の北辰一刀流玄武館や斎藤弥九郎の神道無念流練兵館、桃井春蔵の鏡新明智流士学館）も入っていた。鉄舟は一途で剛毅な気性と6尺2寸、28貫の巨体を生かした荒稽古で、「ボ口鉄」「鬼鉄」の異名をとった。鉄舟は19才の折（安政2年[1855]）、長槍（刀心槍）の名手・山岡静山に師事すると同時に、剣術教授方・井上八郎清虎の世話で新設の幕府講武所に入所、翌年にはその抜群の技量を買われて講武所剣術世話役方（準教官）に抜擢された。ところが、入門早々心技両全の師匠として敬慕欽仰置く能わざる静山の急死に際會、鉄舟はほどなく山岡家から所望されるままに、19才の若い身空で井上八郎清虎の媒酌のもと山岡家に婿養子入りした。こうして鉄舟は、兄静山の道場を継いだ槍術家・高橋泥舟と義兄弟となった。

ロ) 剣禅一如の求道者・鉄舟の挫折と苦節17年

剣道修行に精進する若き鉄舟が「剣法を学ぶは、偏に心胆錬磨の術を積み、心を明めて以て己れ亦天地と同根一体の理、果して寂然たるの境に到達せんとする」¹²⁾がためであった。弱冠22才にして以上の禅理に突き抜ける剣理を説くからには、世上猛虎の下馬評がいかにか高かろうとも、鉄舟の一途な剣道修行の目的は決して殺人剣の修得ではなく、自己修養のための活人剣（降魔の利剣）、修心のための「吹毛剣」（『碧巖録』）の修得にあったはずである。そうした剣禅一如の境地を求道する鉄舟の前に初めて仁王立ちした劍聖が中西派一刀流の達人、浅利又七郎義明であった。伊藤一刀斎景久を開祖とする「一刀流」を受け継ぐ浅利は、「勝機いまだうたざるを未撃に知る」「真に明眼の達人」¹³⁾であった。文久3年（1863）、鉄舟は27才にして、その門を潜った。以来17年間、鉄舟は日夜、浅利の肉薄する剣尖の幻影に悩まされ続けることになった。浅利に立ち会うたびに蛇に見込まれた蛙のように気合負けしてしまう鉄舟は、心気を千鍛万錬するための参禅修行に従来に増して邁進した。

ハ) 生死解脱の剣禅理の開悟

山岡鉄舟が参じた禅は臨濟禅¹⁴⁾であった。そもそも武門のたしなみとして剣禅両全の道を初めてわが子鉄舟に教諭したのは、父の朝右衛門であった。父の薫陶を受けた鉄舟が、後年仏理研究のために相見した主な師家は総勢5名、武州芝村(川口市)長徳寺の願翁、豆州沢地村(三島市)白隠禅師開山になる竜沢寺の星定、京都相国寺の独園、京都嵯峨天竜寺の滴水、相州鎌倉円覚寺の洪川の各和尚であった。20才の折に願翁和尚から授けられた公案の「本来無一物」の徹見に、鉄舟は苦修12年を要している(『修養論』『山岡鉄舟剣禅話』参照)。「本来無一物」とは執着心を離れた自由自在の心境で、禅宗の大成者・慧能の悟達の境地である。

菩提本無樹	菩提 ^{もと} 本樹無し
明鏡亦非台	明鏡亦台にあらず
本来無一物	本来無一物
何処若塵埃	何れ ^{いず} の処 ^{じんあい} にか塵埃 ^ひ を若かん

(慧能語録『六祖壇経』)

その後も剣匠浅利の巨大な幻影が眼前から消えないために、彼は宮内省勤務(明治5[36才]~15年[46才])の間隙を縫い、休日毎に馬で箱根八里越えをしてまで、碩徳の令名高い星定和尚に参禅した。

けれども、彼に生死解脱の剣禅理を開悟させたのは、指導烈日秋霜な滴水和尚のもとでの3年間(鉄舟41才から44才)に及ぶ参究であった¹⁵⁾。41才の鉄舟は、ある日思い余って、滴水和尚を訪ねた。滴水和尚は、剣禅一如の理を語った鉄舟に対して、「善哉言也」、「貴下は剣禅兼至るの人」だが、後は「唯だ無の一字のみ」(無門慧開著『無門関』参照)、と励ましを与えてくれた。その滴水が次の公案を鉄舟に授けたのである。

「兩刃、鋒を交えて避くるを須いず、好手還りて火裏の蓮に同じ。宛然おのずから衝天の気あり」

それから3年、剣禅一如の理を実現するための修行の歳月が流れた。一日、鉄舟は書を求めて訪問した横浜の豪商(平沼専蔵)から商機の妙法を聞く機会を得た(3月25日)。それが機縁となり、突如として公案が解けた(見性悟道)。彼は44歳

にして天地同根、物我一体、心身一如の禅境を解悟したのである。時に明治13年(1880)3月30日、滴水和尚に悟得の見解¹⁶⁾を提出、印可を受けたのである。大悟徹底した生死一如の絶対無の禅境を剣法の実地に応用(活禅)したところ、木剣を構える浅利を思念しても、かつてのたじろぎは最早雲散霧消していた。生死解脱の「無敵の極致」を確信した鉄舟は直ちに浅利に試合を申し込むと、剣禅両道の進境顕著な鉄舟の前に、浅利は戦わずして、中西派「一刀流の無想剣の極意」を伝授した。同年4月、鉄舟は「無刀流」を起こした¹⁶⁾。

鉄舟は明治18年3月に、伊藤一刀斎景久の一刀流を直伝する小野家九世の小野業雄忠政から「一刀正伝の秘奥」を免許皆伝されると同時に、一刀斎相伝の「瓶割の太刀」を授与された(高橋泥舟著『瓶割刀由来』に依れば、鉄舟死後、日光山神庫に奉納)。その「一刀正伝の秘奥」は井上八郎清虎の北辰一刀流とも違い、浅利又七郎義明の中西派一刀流とも違っていった。それは正しく鉄舟自身の「無刀流」と軌を一にするものであった(明治23年作成『春風館永続主意書』)。そこで鉄舟はそれ以後、自流派を「一刀正伝無刀流」とも称するようになった。

鉄舟の「一刀正伝無刀流」の剣境は我敵相對の念を超越した境涯に他ならず、彼はその極意を「見性悟道」¹⁷⁾、つまり妄想を捨てて悟りを開くと道破している。剣禅両道において悟入した鉄舟には、「書亦筆意を變ずるに至れり」¹⁸⁾と証言する。

二) 生死得脱の円現へ - 色情得脱へ

しかしながら、鉄舟には44才の悟入にしてなお、男女の区別に拘る習気が残存していたと言う。そこで「男女の差別心を除らねば本成^{ほんとう}では無い」とその習気の克服に努めた結果、「四十九歳(満48才)の春、一日庭の草花を見て忽まち機を忘るゝこと若干時、茲に初めて生死の根本を截断し得た」と彼は語る¹⁹⁾。つまり、49才にして初めて生死の根本たる色情を断ち切ることができたと、彼は告白しているのである。幕末動乱の砲煙弾雨の真っ直中に青春を燃焼させた鉄舟には、生死得脱(煩惱即菩提・生死即涅槃の境地)はさして遠い目標

とは思えなかったが、浄穢不二修行や色道修行を経て、最終解脱たる生死の根本たる色情得脱にまで到達するのに、知命に近い星霜が流れたのである。

注

- 1) 『西郷南洲遺訓』(岩波文庫本, 1999年), 15頁
- 2) 「君, 世変に当って, 幹旋周密。策に遺算無く, 清爽の心胆を以て, 勇剛の氣象を吐露す。万衆その沢を蒙り, 旧主とこしなえに泰然たり(「二 - 13 亡友山岡鉄舟を弔う」『勝海舟全集 別巻2』[勁草書房, 1973年], 708頁)」
「一体性質の潔白と剛直とに至っては山岡くらしいの奴は, 古今そんなにあるものではない(『英傑 巨人を語る』[日本出版放送企画, 1990年], 186頁)。」
- 3) 頭山満著 『幕末三舟伝』(島津書房, 平成11年), 367頁
- 4) 「慶応戊辰三月駿府大総督府に於て西郷隆盛氏と談判筆記(明治15年3月)」= 「西郷氏と応接之記」『山岡鉄舟剣禅話』(徳間書店, 1997年), 187~213頁
- 5) 「江戸無血開城のいきさつ」『氷川清話』(角川文庫, 昭和11年), 277~278頁
- 6) この折, 海舟は, 「西郷氏へ一書を寄す」と日記に記している(慶応4年5日付「海舟日記」『勝海舟全集』第19巻, 27頁)。「山岡鉄太郎が静岡へ行つて, 西郷に会うというから, おれは一通の手紙をあずけて西郷へ送った(「江戸無血開城のいきさつ」『同上』277頁)」と言う。

他方, 鉄舟は, 「戊辰が変余が報国の端緒」(『高士 山岡鉄舟』[大空社, 1997年], 241頁)(小倉鐵樹は前掲書[133頁]中これを偽書と疑う)の中では, 「一封の書を托せられ, 而して余の附人として薩人益満休之助を従はしむ」と, 海舟から「一封の書」を託され, 薩摩藩士益満休之助の同道が海舟の指示であった, と証言するけれども, 自記「慶応戊辰三月駿府大総督府に於て西郷隆盛氏と談判筆記」の中では, 「一封の書」への言及はない上に, 益満の同道は益満自身の意思と受け取れる。

後者の益満の同行が益満自身の意思か, 海舟の差し金かは, 今日なお不明である。前者の現存す

る「無偏無党, 王道蕩々矣」で始まる格調高い添状が本当に, 海舟から鉄舟に託されたのか否かについては, 既に大森曹玄が疑義を呈している(「二, 鉄舟の功業」『山岡鉄舟』[春秋社, 1998年], 55~60頁)。

- 7) 慶喜の書状と静寛院宮(家茂夫人)の嘆願書を受理した後の西郷と大久保の反応は, 次の書面に明白である。
「慶喜退隱の歎願, 甚だ以て不届き千万, 是非切腹迄には参り申さず候わでは相済まず(「慶応四年二月二日付大久保一蔵宛西郷隆盛書簡」『西郷隆盛全集』第二巻[大和書房, 昭和52年], 406~407頁)」
- 8) 「一慶喜謹慎恭順の廉を以て, 備前藩へ御預け仰せ付けらるべき事
 - 一 城明け渡し申すべき事
 - 一 軍艦残らず相渡すべき事
 - 一 軍器一切相渡すべき事
 - 一 城内住居の家臣, 向島へ移り慎み罷り在るべき事
 - 一 慶喜妄挙を助け候面々, 嚴重に取り調べ, 謝罪の道, 屹度相立つべき事
 - 一 玉石共に砕くの御趣意更にこれなきに付き, 鎮定の道相立て, 若し暴挙致し候者これあり, 手に余り候わば, 官軍を以て相鎮むべき事」
「山岡鉄太郎へ示した徳川家処分案」『西郷隆盛全集』第2巻, 430頁; 慶応4年3月10日付「海舟日記」『同上』第19巻, 29~30頁
- 9) 『西郷南洲遺訓』, 15頁
- 10) 「西郷氏と応接之記」『同上』, 11頁
- 11) 『英傑 巨人を語る』168頁 & 181頁
- 12) 「修心要領」安政5年(鉄舟22才)7月16日付, 『山岡鉄舟剣禅話』(徳間書店, 1997年), 102頁
師匠の剣は, 「活禅の手法で, 生かすがための魔刃」と語ったのは, 門弟の小倉鐵樹(『山岡鉄舟先生正傳 おれの師匠』小倉鐵樹氏顕彰会, 昭和12年, 103頁)。
- 13) 「剣法と禅理」『同上』, 30頁
- 14) 禅宗は三つの系統に大別することができる。臨濟禅, 曹洞禅, 黄檗禅である。臨濟禅と曹洞禅はそれぞれ, 鎌倉時代に栄西と道元により, 本邦に輸

入紹介された。

唐の臨済を開祖とする臨済禅は、公案（参禅者に出す究極の課題）を工夫参究して開悟に到ろうとする看話禅（公案禅）である。この看話禅は鎌倉と室町兩幕府の厚い帰依を受けて、京都五山（南禅寺、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺）や鎌倉五山（建長寺、円覚寺、寿福寺、淨智寺、淨妙寺）が建立された。

それに対して、道元が天童山景德禅寺の如浄にょじょうから法統伝授された曹洞禅しやうとうぜんは只管打坐、ただひたすら参禅修行する默照禅（打坐禅）である。この默照禅は庶民の間に普及した。総本山は永平寺と総持寺である。

他方、黄檗禅は臨済禅の分派で、中国明の黄檗

山万福寺の隠元和尚が江戸時代に伝えた禅で、念仏を称えながら坐禅する念仏禅である。総本山は宇治の黄檗山万福寺である。

- 15) 「剣法と禅理」『同上』，29～45頁
- 16) 「無刀とは心の外に刀なしと云事にして，三界唯一心也。一心は内外本来無一物なるが故に，敵に対する時，前に敵なく，後に我なく，妙応無方，朕迹を留めず。是，余が無刀流と称する訳なり（「剣術の流名を無刀流と称する訳書」『同上』，53頁）。」
- 17) 「剣法と禅理」『同上』，35頁
- 18) 「書法に就て」『同上』，144頁
- 19) 「第5章 鉄舟と禅」『高士 山岡鉄舟』，108～109頁

